

---

# 明治神宮の森の活用と教育実践

長濱和代（目白大学）／上田裕文（北海道大学）／今泉宜子（明治神宮国際神道文化研究所）

キーワード：鎮守の森、保護、造園（作り方）、利用（使い方）、NPO

2020年東京オリンピックに向け、訪日外国人数が年間4,000万人を超えると推定され開催地に近い明治神宮内苑・外苑での過剰利用が予測される。また2020年は、明治神宮の鎮座百年にあたる。明治神宮の森は荒地に人の手で作られた人工林であり、100年にわたって緑地計画が実践されてきた。明治神宮の内苑は鎮守の森として（以下、杜）人々によりどのように利用され、どのように体験されているのだろうか。またその位置づけは、100年でどのように変化し、今後どのような杜が目指されるのであろうか。

2016年以降、発表者らは上田・今泉を中心として「明治神宮とランドスケープ研究会」を立ち上げ、現地での勉強会やフィールドワークを定期的に行いながら、活動報告・シンポジウム開催といった社会発信を通して、広く意見交換を行っている。50年ごとに実施される明治神宮境内総合調査においては、森林調査が生態学的な視点から行われる一方、人間の行動や意識調査などは行われていない。そこで杜の活用と教育実践において実績を持つNPO法人「響」（以下、NPO響）の活動に着目し、実践をリードしている複数の関係者からの面談調査と資料収集により、分析と考察を行った。

NPO響は約20年前に大学生によって組織され、氏子組織に代わる崇敬会の支援を受けており、現在は約20名の会員が活動している。環境教育活動では、内苑のドングリの実生（シイ、カシ、コナラ等）を苗木に育成し、関係団体・組織を通じて全国に苗を提供している。また地域の小学生を対象に、苑内で田植えと収穫を通じた教育プログラムの実施や、神宮内でゴミ収集を実施して、神域でのルール、マナー向上をめざす活動を展開している。これらの活動から、環境破壊を人々の「こころ」の問題として捉え、日本の歴史や文化体験を推進し、神道による自然観の育成を目指していることがわかった。

神宮の杜は緑地であるとともに「聖地」として、杜を作る当時、約10万本の献木と、延べ11万人に及ぶ青年団による造営奉仕の歴史があった。中でも「青年団運動の父」と呼ばれる田澤義鋪氏の業績は大きい。現在、NPO響においては、日本青年館やボーイスカウトとの関わりがあることから、明治神宮造営運動を進めた青年団の志を、若者中心として組織されるNPO響が引き継ぐことにより、明治神宮の杜の活用を推進していると考察できる。